

[特別活動]

よりよい人間関係を構築し、集団の中で自他を尊重し、 互いに自己実現できる生徒の育成をめざして

－ JICA 青年海外協力隊の経験を教育素材として捉える －

藤原 明子*

1 主題設定の理由

(1) 社会的な背景から

グローバル化や情報化、少子高齢化など状況が目まぐるしく変わる現代社会の中で、子どもたちを取り巻く問題も多様化、複雑化している。そのような時代の中で、地域社会の連帯感や子どもたちの人間関係の希薄さが問題となっている。集団の中での人間関係を積極的に構築できない子ども、自己表現が乏しく上手に人と関わることができない子どもが増えている。また、自分の将来像を想像することが難しく、学習や諸活動に意欲がもてない子どもも少なくない。このように自己肯定感が低く、自分に自信がない児童生徒たちに、夢や志をもち、社会をたくましく生き抜くための力を育むことが、教育現場にも求められている。

筆者は、2016年から1年9か月、JICA青年海外協力隊としてパナマに派遣¹⁾されていた経験をもつ。帰国し在籍校の生徒たちと接するうちに、前述した問題と全く同じ状況が見受けられ、生徒間の人間関係の希薄さや、コミュニケーション能力の低さを日々痛感することとなった。人間関係構築のスキルを身につけていないがゆえに、狭い人間関係の中で、周りに過剰に気を遣い振り回されている姿があった。また、直接顔を合わせてのコミュニケーションを十分にとることなく、SNS関連のトラブルを起こすこともあった。

本来、明るく、人と関わることが好きな生徒たちが、集団の中で埋没している状況を、打破する必要がある。集団の中で、相手を受け入れながら、自己実現を果たし、自分のよさや可能性を発揮できるような日常をつくるための教師からの働きかけや手立てが必要だと感じている。

(2) 子どもたちの実態から

現任校は、4つの小学校から集まる全校生徒420名ほどの学校で、多様な家庭環境の生徒が集まる。生徒は、全体的に明るく元気で活発な印象を受ける。自分が理解・納得したことには、物怖じせずに挑戦したり、自己表現したりできる生徒が多い。反面、小学校からの人間関係のトラブルを引きずって入学してくる生徒も少なくない。人懐っこい一面もあるが、自分に自信が持てず常に「所属する場所」を求めている。自分の所属グループ以外の生徒とはうまくコミュニケーションが取れず、仲の良い友達であっても、自分の思いを伝えることができずにトラブルになることもある。そのために、諸活動に参加できず、トラブルが深刻化して登校を渋るようになった生徒もいた。周りの目やこれまでの人間関係のしがらみから、生徒一人一人がもつ本来のよさが発揮できない状況がある。

教育相談や普段の生活の中で生徒一人一人と個別に会話すると、様々な悩みを抱え葛藤しながら生活していることが垣間見える。そこでは、本来の自分らしさを発揮しづらい環境や、うまく自己実現できない状況がある。この状況を改善し、彼らが集団の中で埋没することなく、互いを認め合いながら、かつ、自分らしく自己実現できるような手立てが必要である。また、卒業後の新しい環境の中で多様な人と出会い、より良い人間関係を構築していけるような力を身につけさせたい。さらに、自分のよさをに気づき、自分らしさを発揮しながら生きていける力を育みたい。

2 研究の目的

本研究の目的は、国際協力、国際理解の学習を通して、自他の個性を理解し、尊重し、互いのよさや可能性を発揮しながらよりよい集団生活をつくることの姿を具現化するため、JICA派遣で得た経験をもとに、教師がどのように働き

*上越市立直江津東中学校

かけ、支援していけば効果的かを明らかにする。

3 研究の方法

筆者がJICA青年海外協力隊で経験した異文化との出会い、その時感じた戸惑いや困難について、国際協力・国際理解とは何かを考えるときの題材に用い、人とのかかわりや生き方について考える学習場面を設定する。学習を進める中で、筆者の活動や経験を紹介し、筆者自身が困難をどう克服したかを伝え、人間関係構築のスキルについて考えるきっかけとする。これらのことをベースにして以下の3つの研究実践を行い、児童生徒の変容をみとったり、感想文やアンケートから実践を振り返ったりする。その振り返りをもとに、本実践の成果と課題をまとめることとする。

(1) 英語科の授業の一部としての実践

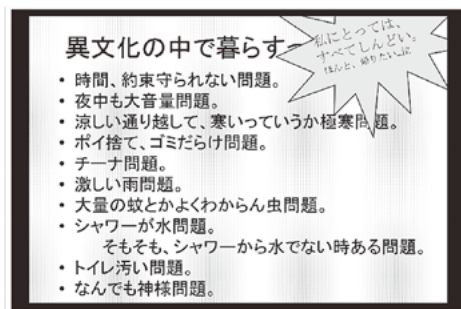
英語科教師と連携し、国際理解教育の一環としての授業。

(2) 上越市立春日新田小学校での実践

小学校教諭と連携し、総合的な学習の時間の一環としての授業。

(3) 担当学級での実践

筆者の担当学級における学級活動の時間の一環としての授業。



プレゼンテーション① 海外生活での苦勞について

4 実践の実際

(1) 英語科の授業の一部としての実践

対象生徒：3学年5学級（約30名×5学級）

ねらい：国際協力ボランティアの話聞き、他国の文化や状況を知るとともに、ボランティアとは何か、自分が今できるボランティアにはどのようなものがあるかを知る。

内容：① 「国際協力」「国際理解」の観点からのプレゼンテーションを見て、海外での生活や活動について知る。

② 写真などから紹介されたボランティアについて考える。

③ ボランティアという視点で、「今の自分にできること」「今、自分がやってみたいこと」を考える。

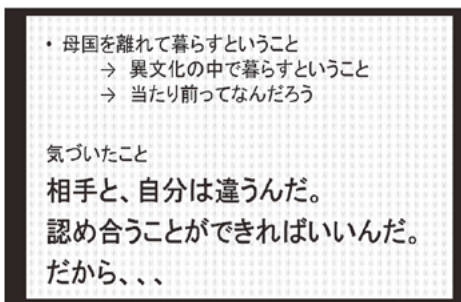
④ 本時のプレゼン等を受けて、エッセイコンテスト応募の動機付けを行う。

本校の英語科では、毎年3年生が「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」に応募している。その動機づけの一つとして実践した。英語科からの依頼で国際協力の視点で話してほしいということであったため、筆者のボランティア活動内容に重点を置いてプレゼンテーションを行った。

その中で、活動や生活の中で筆者が感じた困難を話し「こんな状況で生活や活動を満足にできたと思う？」と問いかけたところ、ほとんどの生徒が「無理」「帰る」「やだ」「あきらめる」といった反応を見せた。生徒たちは「相手やその環境がよくない。」という感想をち、「状況を打破して、よりよい環境にする」という発想がなかなかもてずにいた。日々の生活の中でも、自分の「思い」や「やりたいこと」がうまくいかないときは、相手や環境に起因していると考え、自身を振り返ることのできない生徒が少なくなかった。

最初は、不満や不安しか感じられなかった筆者が、相手に求めるだけでなく、自分が相手を知る努力や、自分を知ってもらう努力をすることをし始めたら、少しずつ事態が好転していったことを話した。国際協力は国際理解であるという筆者の考えをもとに、「相手と協力するためには、相手を知ること」「相手を知るために、相手と協力すること」を語りかけた。また、相手に求めるだけでなく、自分自身を省みることも必要であるということも伝えた。このことは、日常の身近にいる友達との関係も同じことが言えるのではないだろうか、という問いかけでこの時間を終えた。

このプレゼンテーションを受け、生徒が書いてきたエッセイを抜粋する。



プレゼンテーション② 他者理解について

(前略) …確かに、考え方が違うというのは不安かもしれない。だが、人ははもとも考え方が違う。私には妹がいるが、毎日一緒に暮らしていても、考え方や感じ方が違うし、そのことからぶつかることもある。しかし、相手が生きていたことをよく考えると、「その考え方もあるのか!」という、発見に繋がる。人間が今まで発展してきたのは、考え方の違いがあるからなのだと私は思う。ものごとを様々な視点で見るからこそ、様々な発見があり、更に良い方向へと物事を導ける。(生徒作文一部抜粋)

エッセイから、この生徒には他者を認め違いを受け止め、共に成長していこうとする姿勢が読み取ることができる。相手の行動の裏側にある考えを知ることで、他者の思いを知ることができることに気が付き、違いがあるからこそより良い方向にものごとが進むことがあることに気付くことができている。さらに彼女はこのような書き進めている。

(前略) …世界には、様々な、私たちの知らない世界がある。そのことを考えると、わくわくしないか。まず、身の回りのことを学んで、知ろう。それが、世界を知る、相手を知る、一歩になると思うから。(生徒作文一部抜粋)

(2) 上越市立春日新田小学校での実践

小学校教諭と連携し、総合的な学習の時間の一環としての授業。

対象児童：柏崎市立枇杷島小学校 6学年2学級(約60名)

上越市立春日新田小学校 6年生2学級(約35名×2学級)

ねらい：国際協力ボランティアの話聞き、他国の文化や世界の小学生の状況を知るとともに、「夢をもつこと」のよさ、大切さやより良い人間関係の在り方について考える。

内容：① 海外での生活や活動について話を聞き、海外の文化や生活に興味をもつとともに、他国の小学生の実態を知る。

② 教師のプレゼンテーションから「夢をもつこと」のよさ、人との関わりの中で大切にしなければならないことがあることを知る。

③ 「夢をもつこと」のよさや人間関係の在り方について、今の生活を振り返る機会とし、感想やアンケートに回答する。



小学校での授業風景

6年生2クラスで総合的な学習の時間で1時間ずつ授業実践を行った。春日新田小学校の6年生は前年度まで、1学年4クラスほどの大規模校であった。そのため、クラスの中には初めて同クラスになり、あまり話したり遊んだりしたことのない関係の児童もいるということである。「夢や目標をもって生きる」ということにテーマをおきながら、現地教員との活動から人との関わりについて話を進めた。

事前アンケートで「あなたは将来の夢や目標をもっていますか」という質問に90%の児童が「はい」と答えている集団であるが、質問に「いいえ」と答えた児童が、事後アンケートに次のように回答している。

自分の将来の夢や目標を立てて自分が挑戦したことがないことも将来のことを考えてチャレンジしていきたいです。いやなことから逃げないで挑戦したいです。(児童感想一部抜粋)

この時点では、具体的に目標を持つことにはもちろん至ってはいないが、これからの生活に向け、意欲的な姿勢を示している。この実践が彼にとっていい刺激となることを願っている。

また、「友だちとよい関係でいるために、これからどんなことを大切にしていきたいか」という質問にはこのような回答が見られた。

- 相手のことをよく知って、認め合っていくことを大切にしていきたいです。
- 違いを大切に、今遊んでいる友達だけじゃなくて、遊んでいない友達とも遊ぶ。
- 人それぞれ違うから、いろんな人と関わっていきたいです。そのためにも、1人1人を、もっとよく知ることを大切にしていきたいと思いました。
- 相手と自分はちがうということを理解してしっかりみんなの意見をきくこと。
- 違いを認める。たくさん関わる。
- 話をしたことない友だちともかかわっていく。

- 人を決めつけしないで、たくさんの人と話したいと思いました。
 - もっと友だちと仲良くなるために、友だちのことをもっと知りたいと思った。
 - クラス内で話したことのない人ともっとしゃべれるようになりたいし、その人を理解しようと思います。
- (児童回答抜粋)

(3) 担当学級での実践

筆者の担当学級における学級活動での授業。

対象生徒：3学年1学級（30名）

ねらい：国際協力ボランティアの話聞き、自己及び他者の個性の理解の尊重の姿勢をもち、望ましい人間関係の在り方について考える。

内容：① 海外での生活や活動についてを中心に、「国際協力」「国際理解」の観点からのプレゼンテーションを聞き、海外の文化や生活に興味をもつとともに、夢や目標をもつことのよさや、人との関わりの中で大切にすべきことについて考える。

② 担任の経験談から、自分を大切にすることや、他者を理解することの大切さを考える。

③ 学級集団の中で自他を尊重し、互いを自己表現するには、どうあるべきか今の生活を振り返る。

学級開きから1か月経った5月に学級活動の時間で授業を行った。

この学年は、人間関係が固定しており自分の所属するグループの仲間とは関わりあえるが、ほかのグループとは牽制しあい、トラブルになることがあった。新年度の新しいクラスでも、決まったグループで常に行動し、なかなか新しい仲間と活動ができなかったり、新しい人間関係を築こうとする中で今までの仲間とトラブルになったりする姿が見られた。特に女子にその傾向が強くみられた。4月から、グループエンカウンター的活動を行ったり、仲間づくり活動を行っている中での1つの実践として行った。身近にいる大人の生の体験ということで、興味を持ちながら聞いてくれる姿があった。質問やつぶやきを拾いながら進め、筆者と生徒との距離を縮めることも狙いながら話を進めた。

この実践について、当該学級に在籍する女子生徒Aについて注目していく。Aは、2年生時に常に行動を共にしていた生徒とクラスが離れてしまい、新しいクラスでなかなか人間関係を築けず、学級内で孤立傾向にあった生徒である。初日は、学級の中で昼食をとることもできず、ほとんどの時間、机に伏している状態だった。周りには、彼女に声をかける生徒もいたが、周りに壁を作り、打ち解けられずにいた。個別に面談を行った時も、「このクラスに気の合う人はいない。もう、諦める。」と非常に後ろ向きなことを話す姿があった。保護者とも連絡をとりあいながら、登校渋りにつながらないように注意していく必要があった。

Aが、筆者のプレゼンテーションを聞いた後に書いた感想を抜粋する。

「知らない人だから関わらない、じゃもったいない。知るために関わってみよう。関わるために知ってみよう。」「自分の居場所はどこにある。」っていう先生の言葉が、心に残った。

(生徒感想抜粋)

相手が何を求めるのか、自分は何ができるのか

→協力するために理解する
理解するために協力する

仲良くなるために、相手を知る。
相手を知るために、仲良くなる。

プレゼンテーション③ 他者理解についてII

忘れたくないこと

- ・相手を知ること。(決めつけない。くらない。)
- ・自分の考えをもつこと。
- ・伝える勇気をもつこと。
- ・自分だけの思いを押し通さないこと。
- ・自分にも、できないことがあることを知ること。
- ・そして、自分にもできることがあるという自信をもつこと。

プレゼンテーション④ 人間関係構築について

忘れたくないこと②

- ・幸せは、いつもここにある。
- ・今、自分がいる場所が、
自分の居場所。
- ・笑顔は、笑顔を惹きよせる。
- ・誰かや何かのせいにしてても、
いつまでたっても変わらない。

プレゼンテーション⑤ 生徒に伝えたい思い

彼女が感想に書いてきた言葉は、4月の出会いの日から生徒に伝えてきた言葉だが、筆者の経験と併せて伝えたことでより真実味を帯びて伝わったようだった。

実践後、少しずつ周りとも打ち解けよう、受け入れようとする姿が見られるようになった。以前は、班活動を行うときも、活動に参加しようとしなかったが、自分の役割を果たそうとする姿や、班員と談笑する姿が見られるようになり、その繋がりから他の生徒とも関わるようになっていった。7月には、体育祭のリーダーに自ら立候補し、学級の仲間と協力して活動に取り組んだ。リーダーとして一生懸命活動に取り組む姿は、周囲の生徒も感心し賞賛の声をあげていた。今ではすっかり集団に馴染んでおり、人間関係が安定したことで、学校生活全体に前向きに取り組み、学習に対しても意欲的に取り組んで成果を少しずつ上げている。体育祭後に、Aが書いた振り返りを一部抜粋する。

チアリーダーをやるのは初めてだったし、最初は声も出せなくてうまくまとめられなくて、団長とかに頼ってばかりだったけど、チアじゃない子も頑張ってるし、自分も頑張ろうと思って声をかけたり、できることを探すようになりました。1年生や2年生は、関わるのが初めてだった子がほとんどだったけど、一生懸命声を出してくれたり、ダンスをしてくれたので嬉しく思いました。この仲間と一緒に、最後の体育祭ができてよかったです。

(生徒Aの感想より)

他の生徒も、学級の中での活動や、校内の中で行われている仲間づくり活動を通して、少しずつ横の人間関係が広がってきている。年度当初は、簡単な班活動もままならない実態があったが、学級の仲間と進んで協力しようとする姿が頻繁にみられるようになってきている。「あいつは、〇〇だから無理」というような発言もなくなってきた。年度当初は、複雑に入り組んだ人間関係の事情で、席替えの話し合いも難航したが、今では以前に比べ、スムーズに組み替えることができるようになってきている。



学級の仲間や後輩を鼓舞する生徒



体育祭前日、自主的に始まったバトンパス練習

また、何か疑問や意見があった時、生徒同士で解決できるような問題でも教員に聞く、頼るといった生徒が多かった。今では、少しずつ生徒同士のコミュニケーションで解決しようとする姿が見られる。もちろんこの実践だけでなく、日常での関りや活動、体育祭といった学校行事が良い方向に働きかけられているからではある。しかし、早い段階でこちらの理想、目指す方向を生徒たちに「担任自身の体験から得た考え」「担任自身が実感していること」としてはっきりと示すことは、学級経営に有効に働いたと実感している。

5 考察

(1) 成果

「周りにいる人と仲良く協力したほうが良い。」ということは生徒たちは知っている。また、「一人一人違いがあって当たり前。」ということも知っている。「夢や希望をもって、前向きに生きていくことがよいことだ。」ということも知っている。しかし、言葉では理解できていても、それがどうしてなのか、どのようにしたらいいのか、考えたことがなかったり、意識せずに生活している生徒は少なくない。

今回の実践で、「自身の経験に基づいた言葉」として語り掛けることで、生徒は納得しながらそのことを受け入れる姿があった。もちろん、この実践だけで人間関係が安定したり、生徒が目標をもち前向きになったと言い切ることはできない。しかしながら、自分たちの担任または、中学校の先生という身近にいる大人が試行錯誤し、失敗を繰り返しながら経験から得た言葉は生徒に届きやすかったと実感している。実践(3)の生徒Aのように、素直に受け止め、すぐに変わっていかうとする生徒は少ないのかもしれないが、Aの変化は実践の一つの成果である。実践後は、彼女からこちらに関わってくる機会も増え、生徒・教師間の良好な関係を作る良いきっかけともなった。また、人と関わることの良さや、自分の決めた枠の中で生きずに様々な人と関わっていかうとする姿は、周りにも良い影響を与えている。

また、学区の小学校に、ゲストティーチャーとして授業をさせていただく機会を得たことで、小学校教員との密な連携を図ることができた。小中の教員同士が互いの目指すところや現状を共有することは、児童生徒への働きかけ方を見直す良い機会となった。さらに、中学校での指導経験しかない私にとって、小学生と触れることで、視野を広くすることができ、貴重な体験をさせていただいたと感謝している。

(2) 課題

- ① 中には「海外で生活することは大変そうだ・楽しそうだ」という、こちらのねらいとは異なる感想で終わってしまう児童生徒の姿も見られた。どの教科でも言えることだが、導入の際に本時の目標や課題をはっきり提示し、共通理解を図る必要がある。導入の工夫の必要性、また、発問の明確さが求められる。また、児童生徒の実態に合わせた構想を練る必要があり、日頃から生徒理解に努める必要がある。
- ② こちらが一方的に展開する授業にならないようにするために、児童生徒が学習内容を自分ごととして捉えられる工夫をし、時には意見を交換したり、活動したりする場を設ける必要がある。
- ③ JICA青年海外協力隊での経験談を教育課程のどこに位置付けるか、学年や児童生徒の実態により異なる。可能であれば、より一般化したプログラムとして確立したい。筆者の実践を他の教師も共有授業等に活用できるようになっていると、より良いと考える。
- ④ 本実践から始まった国際協力の学びから、今、世界で起こっている紛争のこと、フェアトレードや、児童労働の問題に視点を広げたい。興味・関心をもたせるところで留まるのではなく、国際理解教育をより深める工夫が必要である。

6 まとめ

直江津東中学校区では、主にキャリア教育をベースとして9か年を見通した教育課程を組み、共同実践を積み重ねている。今回取り組んだ本実践は、より良い人間関係の構築や、自他を尊重することの大切さを知らせる活動、さらに集団の中で自己実現できるよう背中を押す指導につながり、本研究の目的に大きく近づいたといえる。

しかしながら、本実践は、人との関わり方を考えたり、自分の生き方について考えたりするひとつのきっかけにすぎない。一つの足掛かりとして、この実践を行い、日ごろの声掛けや関り、学級活動はもちろんのこと、教科の授業の中でも働きかけを行っていく必要がある。

課題③でも述べたが、国際理解教育を推進するための素材が、筆者のJICA青年海外協力隊での経験にたくさんまっている。成果で明らかにしたように身近な大人が、自己の経験を子どもたちに伝えることは、非常に有効であることがわかった。

今後も、貴重な経験を教育の素材と捉え、教育課程に位置付けられるように関連付け、教育プログラムとして組み立てていけるように工夫し、指導力を磨いていきたい。私に、このような自分自身の糧となり、児童生徒の未来につながるような素晴らしい体験の場を与えてくださった、独立行政法人国際協力機構（JICA）、パナマ共和国で共に試行錯誤した現地の先生方、家族、JICAスタッフの皆さん、新潟県教育委員会、そして、背中を押し温かく見守ってくれた家族や現任教職員の皆さんに深く感謝する。

参考資料 独立行政法人国際協力機構（JICA）HP

1) JICAボランティア派遣について

平成27年度1次隊に所属

平成27年4月～ 訓練所に入所

平成27年6月～ パナマに派遣

平成27年8月～平成29年3月

ベアトリス・ミランダ・デ・カバル中高等学校（チリキ県ドレガ）に所属し、数学教育隊員として活動